

卷頭言

世界食糧見通しの再評価

アースポリシー研究所所長
レスター R. ブラウン*
(訳) 近藤 浩

日本は晩冬や初春に黄砂に見舞われる。日本人はほこりや黒ずんだ雨で窓が汚れれば愚痴をこぼすだろうが、韓国は日本以上に直接黄砂にさらされている。たとえば、2002年の4月12日には韓国はとてつもなく大きな黄砂に巻き込まれソウルの住民はあえぐ状態にすっかりおかれた。学校は閉校になり、飛行機は欠航になり、病院は息の苦しい患者であふれた。毎年北京や天津のような中国の東部の都市の住民は砂あらしが始まるとうずくまる。呼吸や目がちくちくするほこりの問題があることに加えて、人々は家屋からほこりを出し戸口や歩道のほこりや砂をきれいにするよう絶えず働かなければならない。農民や牧畜民は、暮らしがだめになり、一層重い犠牲を払うことになる。

中国は今や戦中にある。相手は領土を要求している侵略軍ではなく、拡大しつつある砂漠である。不意打ちをするゲリラ部隊のように、昔からの砂漠は前進し、新しい砂漠が作られており、中国政府はいくつかの前線で戦うことを余儀なくされている。

中国では砂漠の拡大は1950年から10年ごとにみて加速化してきている。中国の環境保護庁はゴビ砂漠が1994年から1999年に52,400平方キロメートル、ペンシルバニア州の大きさの半分の面積が拡大したと報告している。ゴビ砂漠は今や北京から388キロメートルの範囲まで前進してきており、中国の指導者は状況の重大さを感じ始めている。

砂あらしは社会的にも経済的にも影響がある。何百万もの農村の中国人は砂漠が土地を奪うにつれて東へ移住することを余儀なくされている。アジア開発銀行は甘粛省の4,000の村が吹積もる砂により荒廃する危機にあると評価している。1930年代の米国の黄塵地帯はおよそ250万人の「オクラホマ州出身の放浪農夫」に土地を離れさせることを強いたが、彼らの多くはオ克拉ホマ州、テキサス州およびカンザス州からカリフォルニア州へと西へ向かって進んだ。しかし、中国において形成されつつある砂あらしの吹く地帯は一段と大きいし、今日の中国の13億人に比較すると、1930年代の間は米国的人口は1億5000万人に過ぎなかった。米国の移住は百万単位で計られたが、中国の移住は千万単位で計ることになるかもしれない。米国大使館の報告が書いているように、「不幸なことに中国の21世紀の「放浪農夫」には少なくとも中国の国内には逃げるべきカリフォルニアのような土地はない」。

前進する砂漠、浸食する土壤および低下する地下水位のような生態上の損失のしわよせ

* 当研究所参与(平成15年11月30日現在)。

の行き着く先は、食糧のバブル経済を作り出している農業部門である。食糧生産の成長が需要の成長を下回り価格を引き上げるのがいつおこるかだれにもわからないが、意外に間近なのかも知れない。広がる水不足と穀物を枯らす熱波が穀物不足を引き起こすかもしれない。100カ国以上の国が消費する小麦の一部を輸入している。約40カ国がコメを輸入している。ごく一部を輸入に依存している国もあるが、輸入なしでは生き残れない国もある。日本、韓国および台湾は穀物供給の70%かそれ以上を輸入に依存している。イランやエジプトは40%である。イスラエルやイエメンは90%を超えている。ただ6カ国のみが、すなわち米国、カナダ、フランス、オーストラリア、アルゼンチンおよびタイが穀物輸出額の90%を供給している。米国は単独で世界の穀物輸出額の半分近くをおさえてしまい、サウジアラビアが石油についておさえているのよりも大きな占有率となっている。

上述した食糧輸入国は小国や中規模の国である。しかし、今や中国は、世界で最も人口の多い国であり、まもなく世界市場に依存するだろう。旧ソ連が天候のために収穫が減り、1972年にその穀物供給のおおよそ10分の1を求めて不意に世界市場に依存したときには、世界の穀物価格は1ブッシュル当たり1ドル90セントから4ドル89セントまで上がった。パンの価格もまもなく上がった。

中国が穀物の備蓄を枯渇させ、今や1年当たり4,000万トンとなっている不足をまかなくために穀物市場に依存すれば、世界の穀物市場を一夜にして不安定なものにするであろう。

米国や日本それぞれの株や不動産のバブルをみれば明らかのように、バブル経済は崩壊しつつある。とはいえ、今度は地球の天然資源の過剰消費によって作り出された地球規模のバブル経済が目の前にあらわれた。最近の調査は人類の需要全体が地球の持っている再生能力を最初に上回ったのは1980年位だと結論を出した。1999年までに我々の需要は能力を20%も超えてしまった。

最初にバブルが崩壊しそうな経済部門は食糧である。浸食しつつある土壌、劣化する牧草地、低下する地下水位、衰退しつつある漁業、および温暖化のしわよせの行き着く先は、需要に追いつく速さで食糧生産を拡大させることができることである。

食糧のバブルが崩壊するならば、多くの人々にとって生活の脅威となり得る、世界的な食糧価格の前代未聞の上昇が起こるであろう。我々の世代は経済のバブルを崩壊前に収縮させる責任がある。我々が平時のかまえでいつづけるのであれば、経済を自然が支えていくという仕組みが傷つき、ついには経済そのものを徐々に破壊していくであろう。

幸いにして直面している問題には解決法がある。エネルギー経済を再構築し、水の生産性を二倍にし、二酸化炭素の排出を削減するなどの道具だてはある。不幸にして、我々がおずおずとその場しのぎの対応に依存し続けるのであれば、バブル経済は大きくなり続け、結局は崩壊するであろう。我々の世代の挑戦はこのようなことが起こらないようにすることである。